

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.15

2013年7月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

季節外れの大雪で撤退

63年ぶりの白馬主稜山行

大阪山岳会の原点ともいえる1950年1月の白馬岳主稜厳冬期初登攀。約63年ぶりにその足跡をたどる山行が5月連休に中堅・若手会員らで実行された。だが、季節外れの大雪のうえ、大雪渓などで遭難者の出た時期とも重なり、山行は途中で断念を迫られる結果に終わった。以下は参加した明神知(基78)、科野昌蔵(人82)、奥山宏臣(医84)3氏の報告である。



頂上を振り返って=白馬尻小屋上部で

◇



猿倉荘で 左から上島、科野、大野、井上、明神

近年、恒例となってきた5月連休山行。昨年6月の総会で、大野義照会長から「来年は白馬主稜!」との提案があり、メンバーの募集に入った。もともと、大阪外大山岳会との合同新年会が発端で企画された山行でもあり、外大からは上島康嗣氏(81年卒)の参加が決まった。そして5月山行のいつものメンバーである明神、科野、奥山、大倉徹雄(工90)に加え、井上太一(理75)、佐野威和雄(理78)、そして大野会長

の総勢8名がそろい、それぞれの希望を聞いたうえ、3隊を編成して次のような計画とした。

A隊(奥山、大倉) 4月27日・猿倉から主稜取り付き↓28日・白馬アタック後、天狗平付近泊↓29日・唐松岳から八方下山

B隊(大野、上島、井上、明神) 27日・猿倉から主稜取り付き↓28日・白馬アタック後、大雪渓経由で下山

C隊(佐野、科野) 28日・猿倉から大雪渓経由で白馬岳登頂、白馬山荘泊↓29日・鍾温泉経由で下山

〈A、B隊報告〉

27日(土)朝6時、参加メンバーが思い思いの経路で猿倉荘に集合。前日からの雨はあられと雪となって深々と積もっている。登山相談員は、大雪渓方面は県警から登山自粛要請が出ていることを伝え、登山者を待機させていた。私たちもしばらく様子を見る。その後も吹雪は止むことなく、状況は変わらなかったが、日本山岳会のメール配信「春山天気予報」で「明日は稜線は強風なれど快晴」との予報を得ていたので、相談員に「大雪渓を横切るが、すぐに主稜に取り付く」と伝えて猿倉荘出発(7:30)。科野も見送り支援隊ということで白馬尻まで同行する。杓子岳に向かう単独行、同じく白馬主稜

を目指す2人組パーティーと前後して小屋裏手から取りつく。

湿雪、時にあられ交じりの強風が吹き下ろす、ひどい天気。限られた視界とラッセル。杓子に向かう尾根を少し登り過ぎたことに気づき、林道まで下って小休止。長走沢を越えたあたりか(8:30)。後から出発したと思われるスキー隊(その後、雪崩に遭遇)のトレースを追って雪に足をとられながら進む。

風はさらに強まり、度々、ホワイトアウトに。あられと湿雪のミック攻撃で、かなり寒い。2ピッチで白馬尻小屋(夏だけ設置)の少し上あたり(10:00)。先のスキー隊は大雪渓筋の主稜沿いを進み、また2人パーティーは主稜に取り付こうとするのがガスと雪の中に時々見える。天候回復は望み薄で、登りすぎると戻る時機を失する恐れもあり、科野はここで引き返す。

大雪渓上部からの突風は体を持っていかれるほどの勢いで、冷たいことこの上ない。主稜末端近くの雪面に取り付き、ひたすらラッセル。若い大倉、奥山に先頭を任せる。凍った雪の層の上に湿った新雪が50〜60センチ積っており、ラッセルしているとしばしば雪面に亀裂が入って今にも雪崩れそうな状態であった。登るにつれて風雪は強まり、私たちが想定

していた例年のポカポカ陽気の登山は、真冬並みの地獄の一丁目の様相であった。

尾根の末端部分は長い雪面が延々と続き、適当なテント場がなかなか見つからなかった。が、8峰直下の稜線上(標高2,130m)にエンピとスノーソーで切り出して、なんとか4人用テント2つが張れる場所を確保した(14:30)。その夜は絶えず強風が吹いてテントがつぶされそうになり、稜線側は吹き寄せる雪でテントが半ば埋まった。強風の音と、防寒対策が不十分な者は寒さに震え、ほとんど眠れなかった。現役時代に経験した厳しい雪山そのものであった。

28日(日)は3時半起床。晴れ間はあるものの強風は相変わらず。朝食をとりながら進退を協議した。そ



深いラッセル＝主稜末端で

がら一人ラッセルを楽しみつつ猿倉荘に到着(12:10)。積雪状態から、翌日の大雪渓行はこの時点で断念。もう1人のメンバーの佐野と連絡を取るべく車で白馬駅まで下りる。下界は強風ながら晴天。連絡はつくも

の結果、上部のラッセルや不安定な新雪、稜線上の強風、大雪渓下降のリスクなどを考慮して、そのまま往路を下山することに決定(4:30)。しばらく待機して6:30出発。1,000mを一気に下りる。途中、白馬尻の少し下で前日の大雪渓での雪崩遭難救助に向かう県警山岳パトロール隊と遭遇。雪の状態や登山者情報を交換したあと、ひたすら下りる。猿倉上部の林道付近でC隊と遭遇。A、B隊はそのまま下山(8:30)。駐車場にはテレビ局や警察の車が詰めていた。

〈C隊報告〉

27日の白馬尻からの帰りは、5分ほど前につけたトレースがもう消えていた。傾斜の緩いダケカンバ帯でテントを発見。上りでは全く気付かなかった。途中、股下まで埋まりな

到着時間が分からない。落ち合う場所を決めて「四十九院のコブシ」の周辺を散策。後立山の稜線は厚い雲の中、降雪が見える。さらに上空は晴天。夕方に白馬大雪渓での雪崩遭難を知る。佐野は夜になって到着。

28日(日)晴天。朝、メールでA、B隊の主稜断念を知る。林道途中まで出迎えるつもりで猿倉荘を出発。前日の天気がうそのような快晴。運よく20分も行かずに下りてきたA、B隊と合流した。C隊はその後20分ほど尾根筋を登り、白馬主稜を眺めて山荘に引き返す。

〈最後に〉

ルートはほとんど新雪に埋まり、白馬頂上直下の雪庇を練り抜けるチャンス?だったものの、装備、日程、体力などを考慮すると、撤退の判断は正しかったと思う。この季節の白馬主稜は、過去の記録を見る限り、天候とトレースに恵まれれば短時間で駆けぬけることのできる、とても快適なルートのようなのだ。しかし、今回のようにひとたび寒気が入って多量の積雪があると、体力と技術を要求される長大な雪稜ルートとなる。

下山途中に振り返って見た主稜は新雪に覆われ、しっかりと準備を整えてまた戻ってきたと思わせるには十分な美しさであった。みんな、雪稜の美しさに再度のリベンジを誓い

ながら麓の温泉で疲れを癒したのである。

再度のチャレンジ期待

大野会長の話 阪大と大阪外大が統合した今、今回の山行は両大学のOB同士の初めての山行には最適であった。前日からの降雪で約50センチの積雪があり、ラッセル隊はかつての先輩たちと同じように苦労した。強い風と積雪に私も現役時代を思い出すとともに心地よい緊張感を味わった。2日目は晴れてきたものの、風が強くて引き返したが、新雪に覆われた山々は美しく、猿倉から見る主稜は魅力的だった。再度のチャレンジを望みたい。

心身ともに老化を実感

大阪外大山岳会 上島 康嗣

4月26日夜、和泉市の自宅から白馬岳登山の拠点である猿倉荘に車で向かった。目的地が近づくにつれて、激しい雨があられ、やがて雪に変わった。27日未明にたどり着いた山荘周辺は一面の冬景色でした。

思い起こせば、昨年初め、大阪市内のネパール料理店で開催された阪大山岳会の新年会に参加させていだいた時、大野会長と外大山岳会事務局長である船井とが大いに盛り上

がった結果が今山行のなれそめ。小生は「サポート役」でお供させていた。小生は外大の最若手です。席上、なぜか船井の代わりになっていた。小生は外大の最若手です。致し方ないところです。

実のところ、小生は20歳代後半にいったん山登りを辞めました。その後、再開したものの、年1、2回の無雪期登山程度です。そんなわけで今回の登山用具はすべて借り物でした。そんなことを思い起こしながら車中で仮眠。凍える一夜が明けると、雪がまだ降っています。登山準備を進めましたが、頭の中はこの雪でいっぱいです。この天候で登山決行するの？皆さんに付いて行ける？まあ、何とかなるわい……。いつもの思考パターンです。

やがて同行の皆さんと合流し、登山決行となりました。登り始めからラッセル、ラッセルの連続で、踏み跡をたどる残雪期のイメージは皆無です。メンバーは40歳代から60歳代と各世代の代表選手の態でしたが、60歳になりたての小生がバテバテで皆さんの足を引っ張り、主稜完登にやる気満々の大野会長に申し訳ない結果になってしまいました。

大野会長、明神リーダーと同じテントを割り当てていただき、阪大山岳会の伝統を垣間見た思いがしまし

た。禁欲的であり、合理的なんですね。小生とは心構えも違います。山登りに賭ける不断の努力がうかがえました。

翌28日、主稜でのテント泊からほうほうの体で帰着した時、30年にも及ぶ自堕落な生活習慣で己の身体ならず精神までもが、あの若かりし頃の10年間とは雲泥の差であることに気付かされました。これほどまでにバテた山行は記憶にありません。また、凍傷なんでしょうか、手足の第

1関節がいつまでもピリピリしていました。

「自分に謙虚であるべし」ですね。これを教えてくれるのが登山の効用でしょう。身体のみならず精神も老化していることをつぶさに教えられました。捲土重来を期したいです。次回があれば、皆さんの良きパートナーとして参加できるよう精進します。今回、ご一緒させていただいた皆さんにお礼申し上げます。

マッターホルン、私も登った モンブランなど3峰も

井上 太一

一昨年の明神さんのマッターホルン登攀に刺激を受け、半年間準備したあと、昨年8月、スイス、フランスで登山を楽しみました。いちばんの目的だったマッターホルン(4,478m)だけでなく、ブライトホルン(4,164m)、メンヒ(4,107m)、最高峰モンブラン(4,810m)と計4つも登頂でき、大満足です。

12日に登ったマッターホルンはヘルンリ小屋(3,260m)から往復6時間15分(4:20出発、7:50

登頂、10:35戻り)で、当日の数十パーティーのうちトップ登頂、最速往復記録でした。地元ガイド同伴なので4組目に出発し、いつの間にか3組を追い抜き、トップに立ちました。後ろの組でスタートすると難所でかなり待たされ、数時間は遅くなります。

早朝はとにかく寒く、登山手袋をはめていても指先の感覚がなくなり、グリップに苦労しました。かといってミトンでは使えないです。ソールベ避難小屋からの100m超の

垂直の壁は、ガイドから太縄を引き寄せて腕力で登れと言われましたが、明神さんから「ここで肩と腕の力を使い果たした」と聞いていたので、これだけは断固拒否し、3点確保で急いで登りました。その後、アイゼンを付けて氷の急斜面を登りましたが、完全に凍てついていて、ガイドが後続のためにピッケルで丁寧にカットしてステップを整え、かなりの時間を費やしました。

ガイドと踏んだ2人だけの山頂は見晴らし最高で、毎朝ツエルマツトから眺めていた頂きに今立っているという実感が胸がいっぱいでした。下りのやばいところはガイドが繰り出してくれる懸垂下降の連発で、そ



マッターホルン頂上で

れこそ休みなしで駆け下り、地上に無事「舞い下り」ました。23歳のガイド、アンドレア君はウィキペディアにも個人で載っている精鋭で、昨夏、地元ツエルマツト(1,600m)からマッターホルン山頂まで連続登り2時間57分の大記録をつくったそうです。

前夜、彼から、荷物をとことん減らされました。そして彼はとにかく休みなしで行動し、6時間強のうち休憩時間は昼食を含めて計10分もありませんでした。食べたのは干しイチジク2個とドライマンゴー2切れだけ。飲んだのはミックスフルーツジュース500ccだけで、水1リットルは手つかずでした。

私もこの日のために高尾山系10時間競歩や、犬の散歩中に公園の石垣をアイゼンで上り下りして変人呼ば



ヘルンリ小屋から山頂を望む(偵察時)



登頂証明書

13時間爆睡しました。前夜、小屋じゅうが開戦前の軍隊宿舎の如く興奮して、ほとんど眠れなかったのです。翌朝、気持ちよく目覚め、観光客に交じって散歩しましたが、なぜか体の痛みは全くなかったです。不思議なことです。

わりされるなど、それなりの準備はしました。ガイドなしで登頂した日本の好青年がおり、彼は私より技術的にも上でしたが、ルート探しと自らの安全確保のために登り6時間+下り10時間かかったそうです。もう1人の日本人も別の日に全く同じタイムでしたので、ガイドなしではかなり困難な山に違いありません。私は羊飼(イェス)に導かれた羊でしたが、まあ素直で少し要領の良い羊だったのでしょ

う。

戻ったヘルンリ小屋ではビールを数本買って、皆で祝杯をあげました。その後、ハイキングコースを1時間強下り、ゴンドラでツエルマツトへ。ホテル自室でワインを飲み、

小屋からの岩下りは日差しがきつくと、酷暑地獄に一変しました。そういえば、どの山も下山後に体は痛くなかったです。2年前にベジタリアン&フルータリアンになって体質が変わったのでしょうか。

登山のあとはミラノ、ベネチアなど北イタリア観光をと考えていましたが、ミラノのあまりの暑さに急遽、帰ることにしました。

(1975年理学部卒)

ウォール効果で部員増へ

山岳部前主将 角谷 勇輔

現役山岳部の活動報告をさせていただきます。普段は週2、3回、ウォールに集まり、活動しています。また、ロープを用いてリードクライミングの初歩的な練習を行っています。クライミングは最近、メディア等ととりあげられることが多い話題のスポーツということで、部員以外にもウォールを使用する人がおられるので、毎日、大変にぎわっております。ナカガイジムにルート設定をお願いしているのですが、難しい課題が多く、それだけにやりがいがあるという感想をよく聞きます。

昨年造って頂きましたクライミングウォールによって山岳部の認知度や親しみやすさは以前と比べ増しているような気がします。私見ですが、きつい、汚い、厳しいという、いわゆる「3K」の印象を持たれがちな山岳部ですが、そういったものが薄れてきているような気がします。最近、フリークライミングが流行であるということにも起因しているのかもしれない。

部員数はこれまでの5人に加え、

5月末までに新たに3人が入部、計8人になりました。今年ウォールの認知度が高まったという側面もあるようで、4月から見学希望者や体験希望者が多く、去年と比べて新入部員が多くなるのではないかと印象を受けました。

屋外ではフリークライミング中心の活動です。平均して月1、2回、道場の岩場でリードクライミングの練習、笠置や北山公園などでボルダ



ウォールの前で新入部員たち

リングの練習を行っています。また、年1、2回、岡山県の備中などで合宿を行っています。今年未定で、部員達で相談して合宿場所、日程等を決めたいと思っています。

ウォールを建設して頂いたことにより、クラブ運営の計画が立てやすくなり、どんな活動をしているかを学生に具体的に明示することが出来るようになったことで、勧誘がし易くなりました。また、クラブ員同士の意思疎通という観点から見ると、お互いに会う機会が増えたので、以

前と比べてスムーズになり、コミュニケーションもしっかりできるようになったと感じます。

ウォールが建設されて1周年ということで、今回、山岳会報に書かせていただきました。ウォールを建設して頂いて大変感謝しております。この場をお借りして、また、部員を代表致しまして御礼申し上げます。今後も部活動にして励んでいこうと思いますので、これからもよろしくお願い致します。

(文学部3年)

阪大芸術博物館で開催

ヒマラヤ写真展と講演会

野田憲一郎評議員(HATJ元理事)が開催に力を入れている「ヒマラヤ」変わり行く景観」写真展が7月17日から8月25日まで豊中市待兼山町の阪大総合学術博物館で開かれた。また、これに協賛して会期中の8月17日に同館で講演会があり、猛暑の中、予想を上回る50人を超える参加者があった。

写真展はカトマンズに本部のあるICIMOD(山岳総合開発国際センター)が世界各地で開催中のものの日本版で、2011年7月の横浜

を皮切りに各地で開かれている。今回は阪大山岳会も主催団体に名を連ねることになり、4次にわたるP29遠征の写真パネルを出品、ビデオの上映もおこなった。

講演会では、開演に先立って博物館の担当者から「今回の写真展や講演会はこれまで博物館になかった行事であり、本イベントが新しい博物館の展示方法になることを期待している」との挨拶があった。

講演は野田氏の「変わり行くヒマラヤ写真で見る地球温暖化」と大



P 29 遠征について話す大野会長

古参会員の欠席目立つ

夏の白馬集会

2012年度の白馬集会は9月1日から長野県白馬村の「ホテル対岳館」(丸山徹也館主)で開かれ、会員家族を含めて13人が参加した。初日は開会式と、夕食を兼ねた懇親会のあと、別棟の「与兵衛倶楽部」に席を移し、夜遅くまで歓談が続いた。例年、顔をそろえる古参会員の欠席が目立ったのが特徴で、「一度、足場の良い大阪あたりで開くことを考えては」との意見も出た。

2日目は自由行動。3日目の懇親ゴルフは長野市の川中島カントリークラブで開かれ、参加者は名誉会員の丸山庄司氏を含めて3人だった。出席者は次のみなさん。(会長以外は卒業年次順)

大野義照▽兼清喜雄▽野田憲一郎
▽大工原泰▽広瀬貞雄▽打出英樹▽
前澤祐一▽高田邦雄▽出雲路敬孝▽
山田靖則▽田中喜樹

対岳館の丸山氏も出席

初の大阪集会

夏の白馬集会で古参会員の欠席が目立ったのに配慮して「高齢会員でも気軽に出席できる場所」と企画

された初の大阪集会が12月1日夕、大阪駅前マルビルで開かれた。期待した高齢会員の出席こそ少なかったものの、長野県白馬村八方の対岳館会長、丸山庄司氏(名誉会員)

はじめ、夏の白馬集会とほぼ同数の14人が顔をそろえ、大いに歓談した。今後、定期的に開くかどうかについては改めて検討する。

丸山氏以外の出席者は次のみなさん。(会長以外は卒業年次順)

大野義照▽山本光二▽三枝礼子▽
木村裕一▽西川元夫▽坪井和子▽
五百蔵弘典▽大川和秋▽高田邦雄▽
中岡和哉▽山田靖則▽黒岩芳夫▽田
中喜樹

ほぼ全員が近況報告

2013年新年会

2013年新年会は1月31日夕、阪大中之島センターで開かれ、大阪外大山岳会(OGAC)の会員1人を含め20人が参加した。現役山岳部員にも出席を要請していたが、試験期間と重なったことで全員欠席。代わって事務局から阪大ウォールの使用状況などについて報告があった。

途中からは出席者の近況報告となり、ほぼ全員が近況や現役時代の思い出を語った。西川氏は、1955年の冬山合宿で双六小屋に長期間閉

じ込められたあと、帰りのバスでも事故にあって苦労した経験を。また五百蔵氏からは70歳を超えた今もスカイダイビングを楽しんでいるなどの報告があった。

出席者は次のみなさん。(会長以外は卒業年次順)

大野義照▽山本光二▽三枝礼子▽
高木俊夫▽西川元夫▽岡田博司▽広
瀬貞雄▽五百蔵弘典▽打出英樹▽大
川和秋▽高田邦雄▽豊坂昭弘▽山田
靖則▽黒岩芳夫▽大宅幸夫▽明神知
▽科野昌蔵▽寺田浩昭▽尾崎夏樹▽
大阪外大山岳会・上島康嗣

東京支部だより

いぢんまりと「宴遊会」

東京支部の「宴遊会」は4月2日夕から神田神保町の「八羽」で開きました。出席者は兼清喜雄、野田憲一郎、前澤祐一、米澤成二、横尾秀次郎、井上太一の各氏と出雲路敬孝の7人。今回はいぢんまりした集まりとなりました。

野田氏から5月の白馬周辺山行の提案があり、当日出席者では前澤、米澤、横尾各氏と出雲路が参加を希望しました。次ページに山行記録。また、6月に軽い日帰り山行を企画することになりました。

山岳部員増加の話題に関連し、別稿の大島輝夫氏の近況報告にあるように、「学生は金欠だろうから、登山用の装備を補助するのも部活動の一層の活発化に役立つのでは」との提案も出ました。(出雲路記)

残雪の唐松・五竜を縦走

出雲路 敬孝

今年の5月連休は、八方尾根から唐松岳、五竜岳を縦走して遠見尾根を下る2泊3日(山中1泊2日)の計画を、野田憲一郎、前澤祐一、米澤成二、横尾秀次郎各氏と出雲路の5名で実施しました。結果的には唐松岳、五竜岳には登れませんでした



八方池山荘前で

が、十分満足できる山行でした。4月28日、対岳館に宿泊。翌朝、丸山庄司さんに車で送ってもらってゴンドラ駅へ。朝一番で八方尾根に向かうスキーヤーが行列して運行開始を待っている。我々登山客はマイナーな存在であった。8時10分にゴンドラに乗り、兎平、黒菱平のリフトを経て、八方池山荘(第1ケルン)に8時40分着。9時に山荘出発。最初からアイゼンを装着した。曇っていた天候がこの頃から良くなり、時間とともに青空が広がる。第3ケルン、丸山ケルンと高度を上げるにつれて不帰嶮、天狗ノ頭、白馬鍾、白馬と、一昨日の降雪で真っ白になった連峰が見えてくる。



八方尾根上部から見た五竜岳

13時5分、唐松山荘に着き、昼食。剣・立山がよく見える。しかし、ここまでで当初見込みより1時間程度遅れていること、唐松の下りの残雪が多く、時間がかかりそうなことや天候などを勘案し、唐松岳往復は中止。野田、米澤両氏は唐松山荘泊、翌日、八方尾根下山とした。

昼食後、3名で五竜岳に向かった。唐松山荘から大黒岳を過ぎて最低鞍部までの間、下りのガレ場と鎖場が続き、時間がかかる。部分的に鎖が雪に埋もれて夏ルートを歩けず、高巻きを要する箇所もあった。最低鞍部15時10分。あとは緩やかな登り道で、バテ気味の体を押し上げ、17時15分、五竜山荘着。この日の宿泊者は我々3人とあと1人。唐松山荘・五竜山荘間で出会った人は1人と、静かな縦走である。

30日は5時頃起床、5時半朝食。夜間に降雪あり、山荘周辺で20〜30センチの積雪。風雪は続き、濃霧で視界数メートル。無理をせず、五竜岳往復は中止し、下山とする。6時36分、山荘発、白岳山頂まで行ったが、降下ポイントが発見できない。雪庇を踏み抜く心配もあり、いったん山荘に戻る。時間待ちをしている間に小屋の方が降下ポイントにマーキングをしてくれ、9時10分に再出発。もう1人の方も同行し、降下ポイントに9時半

着。風雪と濃霧の中、南東に下りるべきところを南に下るなどして、白岳の下りだけで1時間半を要した。同行者の持っていたGPSが位置確認に役立った。

下りきった頃から雪が止み、我々の蛇行した踏跡がくつきりと見渡せたいことこの上ない。白岳の下部から中遠見山あたりまで発達した雪庇が所々残り、尾根筋との間に割れ目が出来ていた。14時50分、テレキャビンゴンドラのアルプス平駅着。15時10分、ゴンドラ麓駅着。徒歩で大糸線神城駅へ。帰りの松本発「特急あずさ」の車窓から見えたアルプス連峰の夕焼けが印象的であった。

(1967年工学部卒)

会員の近況

白馬集会和新年会の出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順〓西暦。敬称略

大島 輝夫(理49) 私の母校、神戸高校の山岳部は部員がいなくなり、10年余り、消滅していました。その後、復活し、先日のOB会にも10数人の現役部員が参加していました。OB会も部員個人の備品購入のための募金などを行っています。阪大

山岳部も備品購入用の募金を考えてもよいのではないでしょうか。

日本山岳会の仕事は続けており、科学委員会と図書管理委員会に所属しています。科学委員会は一般を対象にしたセミナーを毎年開催し、先日は高山植生、熊に出あった時はどうするか、立山・剣で見つかった氷河の話がありました。毎回100人以上の一般の方が集まります。ほとんど中高年者です。

住吉 仙也 (医54) 88歳になりました。友人の多くが私より若いのに次々と逝き、さびしい限りです。健忘症がひどく困りますが、痛い所などはなく感謝すべき状態です。

鷺沢 忍 (工56) 肺機能が低下して、もう山登りはできなくなりました。今秋に(もし元気なら)ドロミテの黄葉を見にドライブする計画を立てつつあります。

野田 憲一郎 (経60) 「ヒマラヤ」変わり行く景観写真展を6月1、2両日、東京タワーで開きました。東京都内での初の一般公開で、エブレスト登頂60周年記念の「大ネパール展」の一部(ネパール大使館主催)でした。

田村 俊秀 (医63) 7年目の喜界島です。島の梅雨は移り気で、1日のうちに晴れ・曇り・雨、これに霧と強風が混じり、コロコロ変わり

ます。「女心と喜界島」と言ったら、島の流行語になりました。

播本 裕晃 (法65) 裁判所の調停委員をしており、週2、3回、裁判所に通う生活です。市内の仲間とハイキングクラブをつくって6年目。月1回の低山ハイクを楽しんでいます。今夏は木曾駒、立山縦走に出かける予定です。

加藤 佑二 (工68) 住んでいる700戸からなる団地の改修工事実行委員会に参加して施工業者との打合せ等が仕事のようになっています。これが終われば、次は何をするか、予定はありません。元気なうちに山行とまでいかなくともハイキングやウォーキングを始めたいと思っています。今は世界の名峰、日本の名山をBSテレビで見るとの楽しみをしています。いつかは本場ALPSのトレッキングを夢見しています。

鹿野 信吾 (理71) 相変わらずの田舎医者で、栃木県野木町、上野から宇都宮線で1時間ほどのところで開業しています。あと2年ほどは現役のつもりです。最近、自転車にゴルフと元気に遊んでいます。

上松 一雄 (工75) 今年も毎週、品川と高砂を行き来することになります。昨年は井上さんのヨーロッパアルプス遠征の話を皆さんと聞く、懐かしい時間を過ごすことができ、

とても良い年でした。

木嶋 良雄 (工79) 6年前に住友金属鉱山から日本原燃へ転籍し、青森県六ヶ所村に勤務しています。再処理事業部の廃棄物取扱主任者を担当しています。英国・仏国から返還されるガラス固化体貯蔵管理施設の主任者業務です。六ヶ所村での単身生活はまだまだ長くなりそうです。再処理工場では各種施設を歩き回ることを心がけており、毎日約1万5千歩以上歩いています。

六ヶ所村へ赴任してから50歳の手習いで、コーラス、フルート、トランペット、オーボエを楽しんでいます。最近ではハード系のパン作りも始めました。

松尾 敬志 (歯80) 時間があれば裏山を走っています。登りは無理ですが、下りと平坦な所は何とか走れます。4月から徳島大学の歯科担当副院長になり、疲れ気味です。

佐々木 徹 (経82) 4月1日付で4回目の海外勤務で、中国の成都市に行くことになりました。

野口 明 (基83) 昨年は8月に中国四川省の未踏の岩山の初登頂に成功しました。「岳人」11月号の登山クオニクルにも載りました。

畑 秀信 (人84) 50歳を過ぎて体力不足を補うため、平日はランニングとジム、週末は山へ、と現役並

みに頑張っています。

藤田 繁雄 (医91) 紀南の地へ赴任して7年になります。すっかり水が合い、今年家は建てましたので、こちらに永住です。地域医療に腰をすえて取り組むつもりです。

佐藤 貴美子 (医01) 九大病院で臨床研究コーディネーターの仕事を始めて2年目。小1と幼稚園年中の娘の母親業とで多忙な毎日をごくりしています。

渡辺 景子 (基05) 西表島でカヤックを体験しました。海の上をじっくり楽しむのは初めてで、パドルを伝って潮の流れを自分の手で感じると、海のエネルギーはすごいと実感しました。

追悼

玉井 康雄氏 (第3次P29遠征隊副隊長) 2012年6月26日死去、73歳。1961



年理学部卒。現役時代は黒部川上廊下積雪期初横断などに参加

した。卒業後は富士写真フイルムに入り、磁気材料開発などに従事した。1969年の第3次P29隊では東面からの登頂ルート開拓に力を入れ、翌年の第4次隊の登頂成功に導

いた。自宅は神奈川県秦野市。

玉井康雄と悪童たち

田村 俊秀

1957年春、大学に入りたての、無聊をかこつフレッシュマンたちが山岳部の門をたたいた。当時、井上靖の『氷壁』が人気で、山へ行けば美女とロマンス、の打算もあったが、全く女性に縁のない世界とは思っても寄らなかつた。そして、最初の合宿で体重ほどの荷を担がされ、尻を蹴つ飛ばされるスパルタ式訓練の世界でもあった。

そのうち、似たもの同士が仲間となり、山行きを共にするようになり、ついには終生の友となった。その一つ、玉井、笠松、田井、田村らを中心とする仲間は、雪溪、岩場、冬山でしごかれるうち、薄汚れ、不敵な面構えの悪童に変貌した。六戸先輩が赤沢岳の黒部側尾根に突き出た「猫の耳」に我々を連れて行った時は、黒部ダム工事のトンネルが貫通したばかりの時期。針ノ木峠越えを省略すべく、昼休みのダイナマイト休憩中にトンネルを駆け抜けて信州側へ出たこともあった。

玉井独特の皮肉交じりのユーモアが我らグループを面白くしたが、他方で随一の情報通、かつアイデアマンであった。日本のみならずヒマラ

ヤなどの登山記録にも通じ、我々の登山を奇抜でカラフルにした。黒部川源流、雲ノ平、薬師岳東面は当時ほとんど未知の地域で、このあたりが悪童たちのフィールドになり、開拓者気分で縦横に歩き回った。

ヒマラヤは彼の夢であり、アンナプルナ初登頂やエベレスト遠征を我が事のように語った。P29遠征の企画が出るや、周辺の情報を調べ上げ、挙げ句の果て、P29の粘土模型を作り、登山ルートの研究まで始めた。1969年、念願かなって第3次遠征隊に参加したが、不本意なこともあったらしく、ヒマラヤからははるる我々悪童仲間を懐かしがった。その思いが遠征記録の集大成『P129登高日記』を作らせたのだろう。

玉井は去り、残る悪童たちは散り散りになり、後期高齢者になりつつある。が、今でも我知らずに玉井康雄の仕草や物言いがふと出てくる。彼は私の一部となっている。

(1963年医学部卒)

ヒマラヤ遠征に打ち込む

笠松 卓爾

玉井さんは亡くなる前、病身に打ち打って大変な努力をつぎ込み(奥さんの助け甚大) P29遠征隊について彼の知るところを『P129登高日記』として書き残しました。登山路

を求めて阪大山岳会が東面に目を向けて以来、確かに彼は、いつもその渦中にいた、と思います。写真が得意であった彼は、数少ない頂上付近の写真を裏から眺めては、時のリーダーの田村俊秀さん相手に論議に熱を上げていました。

山岳部の山行で一番楽しかったのは、何と云っても、雪のしまった雪面を、あるいはグリセードで、あるいはアイゼンを利かせて駆ける5月連休の山行でした。田村俊秀・玉井康雄・田井英男・笠松卓爾の4人つるんで出かけたものです。

そして私たち世代の山岳部活動の原点は何と云ってもヒマラヤ遠征へのあこがれでした。P29遠征との関わりについては田村さんに任せるとして、私個人の思いは以下の詩に託しました。



単独行の男たち

2012・10・03 保母武彦さん、
続いて玉井康雄さんの訃報をうけて

生来のスポーツマン

クールなひげ面でスキー上手な男が
仲間にいた

そのしなやかで 岩登りのうまいお前さんが この動きの鈍い奴によく付き合ってくれたよ まったく

近くは不動のタケノコ岩 あるいは

はるか穂高のジャンダルム飛驒尾根
滑落の恐れを忘れ ざらついた岩肌
をつま先でふれ この両の手指に
なじむうれしさよ

今も分らない 俺には その君が
どうして ヒマラヤ熱にかぶれな
かったのか

黒部川源頭にうづくまる赤牛岳の東
面支尾根 あの大木の根元にうめた
赤子の頭ほどもあるガーネット
お前さんがいなくなつた今 俺には
もう この宝物を掘り出しには行け
ないよ

今も思いだす 沈殿のつづく雪山の
テントの中で
あるいはまた 夜半 君の居室での
会話を

第一 精神科医を志す男が 理学部
の学生に

恋の悩みを訴えるのも変だ

ああ、リアリストと云うよりは む
しろ好奇の眼にあふれたアンチ・ロ
マンチストよ 君は

サトー・ササールの死を悼んでから
ずいぶんと時がたった そして今
2012年の夏 また二人の友が
逝つた

霊峰カイラスの向こうに往つてし
まった

胸痛む思い出 別れた恋人たちから

の贈り物
それは断絶の証し……

古い山の男たちが顔あわせる度に云うのは

「次は、あの山へ一緒に行くこうや」
ではなかったのか？

分かっているよ。俺には
いい奴が先に往つてしまつたのを
でも、けしからぬ話だ。断りもなし
の単独行とは……

(1963年医学部卒)

保母 武彦氏 2012年9月



14日、胃がんのため死去、74歳。
1963年歯学部卒。現役時代の積雪期初横断などに参加した。岩登りの名手として知られ、無雪期の黒部川上廊下完全溯行を成功させた。卒業後は郷里の群馬県高崎市で歯科医院を経営した。

突然の訃報に驚く

大工原 恭

保母君は私と同じ1957年4月歯学部入学であるが、彼が山岳部に入ったのは教養2年からであった。ただ、彼は抜群の運動神経とバランス感覚、それに体力で、岩登りなど

もすぐに上手くなり、あつという間に私を追い越した。合宿やほぼ日曜日ごとにあったトレーニングで何度も一緒に登つたはずだが、彼はもう上のグループに入っていたのか、その記憶がほとんどない。

1959年3月の春山合宿(積雪期上廊下初横断)で虫垂炎様患者が出て、それを烏帽子小屋のベースに伝えるため、保母君と行くことになった。しかし、その日は朝から猛吹雪でキャンプを出られず、ようやく次の日の午前3時頃、野口五郎岳の斜面に掘つた雪洞を2人で出た。天気は回復しつつあったが、強風が残っていて寒かった。そんな中を30分ほど歩いた時、西側の薬師岳から立山につながる稜線のスゴ乗越の先に富山の明かりがきらきらと輝いているのが見えた。その美しさに我々は寒いのも忘れ、しばらく足を止めて眺めたのが記憶に残っている。

保母君の山岳部での業績は1962年夏の黒部川上廊下完全溯行であろう。当時、保母君は学部4年であり、病院実習の夏休みを利用して出かけたと思われる(当時の歯学部では、最終学年の病院実習の時は、半数ずつが交代で1カ月間の夏休みをもらえる制度であった)。この山行は彼の心に強く残つたらしく、後になつても山の話になると、

必ずこの上廊下の話になつた。

保母君は長患いだった奥さんを献身的に看病した。その間は山岳会の会合にもほとんど顔を出さなかったが、数年前に奥さんを見送つてから、また夏の白馬集会に来るようになった。しかし昨年は彼の姿が見えず、どうしたのかなと思つていたら、9月末、田井君から突然の訃報を受けた。胃がんだつたとのこと。最後はさぞ辛かつたろうと思うと心が痛む。寂しいことである。御冥福をお祈りする。(1963年歯学部卒)

ひと夏の思い出

横尾 秀次郎

1962年、3年生の時、「上廊下へ行かんか」と保母さんに誘われた時は天にも昇る気持ちだった。上級生のお姉さんを慕う女学生のように、保母さんは後輩達の憧れであった。それは卓越した登山技術と静謐でノーブルな人柄ゆえだった。それに、黒部川上廊下はなんととしてもやってみたい目標だった。

8月、高田邦雄君との3人で針ノ木峠を越え、出来て間もない黒部湖を渡つて平ノ小屋を過ぎ、東沢出合着。そこから上廊下の溯行が始まった。初日はスゴ沢手前まで、2日目には立石の岩小屋までほぼ沢通しの溯行に成功した。威圧的な上ノ黒ビ

ンガの胸壁、トロと激流の連続で、渡渉は思いもよらない廊下状の岩壁をハーケンを打ち込んでへつり、エアマットにつかまって流れに飛び込み、とにかく高巻かずに進んだ。岩魚と露の味噌汁の夕食を作り、川原で流木を燃やし、温かくなった砂の上で星空を見ながら野宿した。それは、今も鮮やかによみがえる心躍る山行であった。

それから50年、何度か山行を共にしたが、4年前の雨飾山が最後になった。でも、あまりに思いがけない訃報に、今も榛名山麓に隠棲されていて、またいつか会えるという気持ちが消せないでいる。(1964年工学部卒)

編集後記

注目の白馬主
稜山行は季節外

れの大雪山で撤退となりました。来年に期待しましょう。井上太一氏のマッターホルン登頂は、日本列島徒歩縦断に続く2年連続の快挙。元気に頭が下がる思いです。久しぶりに現役山岳部の報告も掲載できました。垂直ばかりでなく、水平方向の登山も心がけてほしいところですよ。

「私のこのごろ」は都合によつて休載しました。

(会報担当・高田邦雄)